63

桃山時代の薬進物：山科言経（1543–1611）の香薷散とその香薷散賦之衆

アンドリュウ・ゴーブル

Department of History, University of Oregon, USA／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員

十六世紀末に近世医療社会の基盤となった新医療文化が台頭した．医療の専業化，医者の新専門階層としての出現，個人の健康管理の可能性，家庭医学の発展，養生和歌等が象徴する様に庶民生活文化の中で医薬に対する自覚が新たに定着した．ここで医療文化のもう一つの面をとりあげる．これは公卿兼開医の山科言経が自家製の香薷散を薬進物にして新たな贈答習慣を始めた事である．服部敏郎氏（『日本医学史研究余話』，96–97頁）はすでに言経の習慣を注目し「お中元」の類と評価したがここでその実態をより詳しく検討する．

言経は1586年に京都から大阪の中ノ島本願寺に流され，1591年から本願寺の京都敷地に居住した．寺内町医として生活を送りその日記は当時の医療社会に関する貴重な資料である．日記には1586年から1606年までの二十一年間のうちの十九年間の香薷散賦之衆への進物に関わる記載があり，それは前近代において他の資料では見られない贈答品に関する最詳の記録である．

香薷散は頭痛，腹痛，嘔吐，下痢などに用いる．成分は香薷，厚朴，藕豆（白藕豆）で，割合は言経は記していないが杏雨書屋所蔵の鷹取甚右衛門尉藤原秀次の『腫物口伝書』によると4，2，2であった．言経の父親言継も医者で良く香薷散を調合し，患者に投薬し，時に旅に立つ人に上げ，山科家の名薬のようであった．ところが言経は京都にいる間にはそのような進物を贈らなかった．中ノ島に移動してから初めて香薷散を恒例の進物にした．それは本願寺関係者の新顔の医師として人間関係を強めたいという気持ちがあったのであろう．

香薷散賦之衆（方々香薷散遣了衆等も書く）は親戚，庇護者，隣様，近所の人々で，本願寺門主，町人，河原者等の諸階層の人間を含むが，ほとんどは患者でも有ったので医師としてその進物を贈った．各年の香薷散賦之衆に入っている人々は多少違い，中ノ島での人物と京都での人物も多少変わるが名前を記録するために長期的名簿を作成したようである．その名簿を参考にして毎年に世帯や世帯人又個人に薬を進物として贈った．1586年から1606年までに1,637世帯や個人に届け（中ノ島は284，京都は1353），慶長三年（1598年）に185にも及んだ．日記には人名，家族関係，商業や居住地，と各人に上げた分量が記されている．数日間（たまに数週間）の間にある順番に各家に届けた．

進物の香薷散の分量については包，両，と服の三種類があった．最初の1586年と1587年の二年には包と両で配ったが，1588年から服も使用しその後はその形が主となった．その理由はよりたくさんの人々に上げられることも出来，又自分が受者の健康に留意していると言う気持ちを伝える為に一人ずつに進呈したと推測される．一人当たりの服の量は多少異なる（二十服，十服，七服，五服等）．1586年から1606年までに贈った分量は345包，116.5両，14,999服（中ノ島は230包，18.5両，2,105服；京都は115包，98両，12,894服）．日記によると1包は50服，1両25服に相当するので服として計算すると二十一年間の内の十九年間の服の総計は35,161.5服に当たる．

進物の香薷散の価値や値段については日記によると一服の値段は二文であり，その基準になると服の総計の35,161.5服は70,323文に相当する．当時の物価や購買力は十分に知られていないが言経が進物に費やしたお金の額は相当なものであったと思われる．